田辺市立美術館NEWS

# ORANGE

Vol.36

鍋井克之《夢殿（法隆寺）》1930（昭和5）年　田辺市立美術館蔵

## 作品紹介　鍋井克之《夢殿（法隆寺）》

鍋井克之（1888～1969）は、1930（昭和5）年に刊行した著作『新しき風景画の進路』の中で、自身の仕事について「西洋画の約束である伝統的な技法から逃避せずに、日本画の領域へ踏込んでゆくことで、『油絵日本画』を創作すること」と語っている。鍋井は西洋画の技術の根底に写実を見ており、それに基づきながら日本人独自の油彩画の世界（油絵日本画）を開拓することを生涯の目標とした。

本作のように、日本の古建築をモチーフとすることも「日本画の領域へ踏込んでゆくこと」の一つであっただろう。現地で写生を重ね、日本画の線描とは異なる、粘り気のある筆触と明るい色彩を用いた油彩画の描法によって、この殿堂の重厚な存在を写しとっている。鍋井の意図した「昔ののどかな、何処となしにゆったりとした、太古の音楽でも聞えて来るような感じ」は、充分に表現されていよう。日本の風景を描いた油彩画の中に特筆されるべき作品となっている。

（学芸員　三谷　渉）

## REPORT 「きのくにの三画人」

田辺市立美術館は昨年、開館から25周年を迎えました。これを記念して、近世画壇で活躍した文人墨客の中でも特に、後世に“紀州の三大文人画家”として名を遺した、祇園南海（ぎおん・なんかい/1676～1751）・桑山玉洲（くわやま・ぎょくしゅう/1746～1799）・野呂介石（のろ・かいせき/1747～1828）の画業を紹介する特別展「きのくにの三画人」を昨年10月から今年2月にかけて3部に分けて開催しました。このうち、第1部と第2部については、期間中に開催される「紀の国わかやま文化祭2021」に合わせた特別連携事業として実施し、紀州が誇るこの三画人の業績を改めて広く紹介する機会としました。

第1部：祇園南海の会期中は当文化祭の只中であったことによる効果か、多くの方々に観覧いただくことができました。第2部：桑山玉洲については、会期の前半で文化祭が終了を迎えましたが、会期の後半には暫く行うことが出来なかった展示解説会を開催し、参加者の方々にご好評いただけました。第3部：野呂介石の会期では、展示解説会は開催できましたが、予定していた公開対談については、また猛威を振るい始めた感染症の拡大を防ぐため、残念ながら中止となりました。一方、会期を通して展覧会クイズやスタンプラリーを実施、積極的に参加いただいた方々の中には各会期全てをご覧いただいた方も多く、紀州の文人画の魅力を少なからず感じていただくことが出来たのではと思っています。

（主任　辰巳　充）

「きのくにの三画人」第3部：野呂介石の会場

## 田辺市立美術館へのきもち㉖

私は現在、田辺市立美術館近くにある県立情報交流センター Big・U内の和歌山大学南紀熊野サテライトに勤務しています。田辺市立美術館との関係は、今から16、7年前に勤めていた串本高校の教員時代に遡ります。同校には資料館があり、原勝四郎の現存する最初期の作品《木槿》を所蔵していました。そのため、田辺市立美術館が原勝四郎展を企画する際に、同館の学芸員、三谷さんから貸し出しの依頼があり、当時、同窓会と資料館の担当をしていた私が対応しました。三谷さんとは、それ以来のお付き合いで、これまで親交を深めてきました（同作品は、その後、田辺市立美術館に寄託という形で「里帰り」することになりました）。そのことがきっかけとなり、私自身、展示替えがある度に田辺市立美術館に通うようになって、現在に至っています。昨年、定年退職したときの勤務校、桐蔭高校の校長室にも、原勝四郎の傑作の一つと言える《浜辺の風景》が飾られており、何かの縁を感じました。

美術館前の花壇はいつも花いっぱいです

田辺市立美術館は、全国的にみて小規模の美術館ですが、展覧会の企画や展示解説等については定評があります。また、脇村兄弟のコレクションに加え、原勝四郎や野長瀬晩花、昨年お亡くなりになった稗田一穂等の生誕の地にある美術館として、それらの作品がまとまって収蔵されており、他の美術館からしばしば貸し出しの依頼があると聞いています。今後はコレクションの更なる充実のために、アートファンド的な基金として、クラウドファンドや市民の寄付を募るような仕組みを導入すれば良いのではと思います。

また田辺市立美術館は、たいへん自然環境に恵まれた美術館です。広大な敷地の新庄総合公園内にあり、樹木や植物等が豊かで、季節の移り変わりを感じることができ、自然と文化が見事に調和しています。その上、公園内には野外劇場も備わっており、憩いの場として、県内外を問わず老若男女が集っています。私は、余裕があれば勤務時間前や昼休み等を利用してウオーキングやジョギングを楽しんでいます。コロナ禍では困難だと思いますが、一層の活性化のためには、最近田辺市内でも増えているキッチンカーを使ったグルメ選手権や、大規模なバザー、蚤の市等の定期的な開催、あるいは、コンサートや演劇、ダンス等のパフォーマンスの場としての野外劇場の積極的な活用が考えられるのではないでしょうか。公園の敷地や設備がこれまでにない取組で、より多くの人に活用されれば、その延長として、美術館の来館者も大幅にアップが見込めると思います。

芸術は人生を豊かにします。豊かな人生のためには日常生活に美術や音楽が必要です。その意味で、家庭のリビングの延長として美術館があることが理想です。公園内を散歩して五感で季節を感じ、美術鑑賞ができるのが田辺市立美術館の最大の特徴です。勝手な「きもち」ばかり申しましたが、運営にあたっておられるスタッフの皆さんに敬意を表しつつ、より一層文化的に賑わう美術館であってほしいと願っています。

（和歌山大学南紀熊野サテライト　地域連携マネージャー　木皮　享）

田辺市立美術館NEWS　ORANGE Vol.36
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和4年4月1日

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

## 編集後記

今号もお手にとっていただきありがとうございます。折込みの展覧会案内とスケジュールは、切り取って折りたためばコンパクトに保管できます。休日の予定を決めるきっかけになど身近に活用していただければ幸いです。
皆様のご来館をお待ちしています。

（F.O.）

## 2022年度展覧会案内

1. 特別展　瀧川雅紀　2011－2022
和歌山県海南市を拠点に活動し、絵画における空間の問題をテーマに独自の表現を探求し続けている、瀧川雅紀（1966－　）の作品を紹介します。

2. 館蔵品展　鎧の表現
近年収集した、鎧による造形作品のコレクションを一堂に展観して、その魅力を伝えます。

3. 小企画展　近代紀南の画家Ⅲ　稲田静處
近代に紀南出身者で画家として活動した人物の軌跡を確認して紹介する展覧会シリーズの3回目。画家、漢詩人として活動した和歌山県野宮市出身の稲田静處（1865－1944）を取り上げます。

4. 特別展　稗田一穂展
昨年、満100歳でこくなった和歌山県田辺市出身の日本画家、稗田一穂の芸術を回顧します。戦後一貫して新しい日本画の創作を追求し続けた、その画業を振り返ります。

5. 館蔵品展　雑賀清子
特別な親しみをもって紀南の自然を探索し、制作へと結びつけた画家、雑賀清子（1933－2017）の植物スケッチを展示します。

稗田一穂展
《風吹》　2009（平成21）年　個人蔵

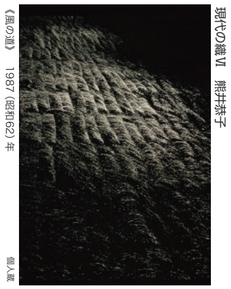
## 2022年度展覧会案内

1. 館蔵品展　鮫ヶ中の山水　－文人画と南画－
鎖国していた江戸時代に中国文化に憧れをもって描かれた山水画と、開国を機に海外の文化が流入してから描かれた山水画とを、共通点や相違点に注目して展示します。

2. 特別展　現代の織Ⅵ　熊井恭子
現代の織った織の造形を魅力する展覧会シリーズの6回目。金襴糸を主に使った制作による、軽・断・透・結を展開し続け、国際的に評価される熊井恭子（1943－　）の作品を紹介します。

3. 特別展　稗田一穂展
昨年、満100歳でこくなった和歌山県田辺市出身の日本画家、稗田一穂の芸術を回顧します。熊野の風景をテーマにした作品を主に展観します。

■くまびでつくろう！
講師のアーティストと参加者が一緒になって作品をつくるワークショップ「くまびでつくろう！」の第1回。作った作品は展示して、公開します。



現代の織Ⅵ　熊井恭子
《風の道》　1987（昭和62）年　個人蔵